

(令五国発後)

小論文

- ・問題は1～15ページである。
- ・下書き用紙は中に2枚入っている。

注意 解答は答案用紙に縦書きで記入しなさい。

小論文 二五〇点

次の文章を読んで、あとの問一〜四に答えなさい。

日本は自然に恵まれた国です。海に近ければ豊かな海の恵みが、山に近ければ豊かな山の恵みがあり、それらの恵みを活かした、世界に誇る食文化もあります。しかし自然に近づけば、豊かな恵みだけではなく、荒ぶる自然にも向かい合わなければなりません。

地域に住まうということは、その地の自然の恵みに感謝し、誇りを持ってその地で穏やかな日常を過ごすことですが、長年にわたって地域に暮らせば、ときに自然が荒ぶることもあります。穏やかにその地に住み続けるためには、自然が荒ぶるそのときだけはしっかりと対処して、災いをやり過ごすことが必要となります。それを防災というならば、防災とは「地域に住み続けるためのお作法」ということができます。

しかし、ときに荒ぶるとはいっても、東日本大震災の巨大津波や近年の激甚化した豪雨災害の現場を目の当たりにするとき、対処し切れない災害に地域はどのように向かい合えばよいのか——という現実的な問題に直面します。残念ながら、このような巨大災害が実際に起こってしまったとき、完全に難を逃れるだけの具体的な名案が私にはありません。しかし、それであってもその地に住まうとき、私たちは行政も住民も一体となって、地域みんなでそれに向かい合わなければなりません。そのとき、地域として災害をどのように理解し、何が大切になるのかを考えてみたいと思います。

日本一の津波想定「三四・四メートル」を突きつけられた町、高知県黒潮町くろしほちやうの事例を紹介します。

黒潮町は、カツオの一本釣りで有名な高知県西部の海沿いの町です。カツオを筆頭に、海の幸は言うまでもなく、きれいな浜辺が自慢で、砂浜そのものを「砂浜美術館」と誇り、ホエールウォッチングもできる海の恵みいっぱい自然豊かな町です。この町が、東日本大震災の翌年である二〇一二年三月に中央防災会議が発表した南海トラフ地震の津波想定で、三四・四メートルという

注一

注二

日本一の津波想定を突きつけられました。

一〇〇〇年に一回とも言われる東日本大震災の巨大津波を実際に経験してしまったわが国ですから、沿岸部の地域にとって、巨大津波は他人事ではありません。誰もが心配になって、「もし同じような大津波があるのなら、どんな津波なのか」知りたいと思う。それは当然のことです。また政府も、あの巨大津波が起こった以上、沿岸部の地域を東日本大震災級の巨大津波が襲った場合にいかなる事態が生じるのかを把握して、それに対する備えを強化しなければならないと考えることも理解できます。そのような経緯で、東日本大震災から一年が経ったころ、想定し得る最大級の津波予測値が公表されることになったわけです。

さて、問題はここからです。この巨大津波想定を示された地域は、想定をどのように理解すればよいのでしょうか。とりわけ、黒潮町に示された三四・四メートルという数字は、あまりにも巨大です。いったい、黒潮町はどのように向かい合えばよいのでしょうか。どう考えても、堤防で防ぐことはできません。実際に三四・四メートルの巨大津波に襲われたら……。言うまでもなく、町は壊滅状態を覚悟しなければならない状況です。

この想定が出された直後、町は恐怖に静まり返りました。そして、役場には緊張感が走りました。町民からの問い合わせが殺到することだろうと、役場は身構えたのです。しかし、発表直後から電話は鳴ることもなく、町は静かなままでした。むしろ、それが町民の恐怖を何より物語っていたと、のちに町長(当時)は振り返っています。

巨大津波想定を突きつけられた黒潮町は、怯^{おび}えるだけで無策でよいはずはありません。できることはすべてやろうと、巨大な津波避難タワーを整備したり、避難路を整備したりと、一年間にわたって、できる限りの対策や検討を行いました。しかし、対策に邁進しつつも、それで三四・四メートルの津波に備えたことになるのか。町長は悩み抜いたと言います。

東日本大震災から二年、巨大津波想定から一年が経ったころでした。その黒潮町長から連絡をいただいて、私は町長に会うことになりました。

無理もないことですが、町長は三四・四メートルという数字に大変な衝撃を受けておられました。そして、そんななかでも懸命

に町民を守る方法を考え、でき得る限りの対策を一年間にわたってやり続けてきました。しかし、それにもかかわらず、この津波想定に対して町民を守り抜く自信が持てない。そんな苦しい胸の内を率直に語ってくれました。

「先生。私は住民を助ける自信がない。どうしたらいいでしょうか。ぜひ教えを乞いたい」と深刻な表情で語る町長と向かい合っていて、私は、初対面の町長の心の在りどころを探りながら話を聞いていました。そして意を決して、あえて軽いタッチで、こう言つてのけました。

「町長、日本一でよかったですじゃないですか」

おそらく、町長にすれば思いもしない言葉だったと思います。そして、苦悩し続けてきた立場からすれば激怒しても不思議ではないほどの言葉です。それを言うことは、私にとっても内心は勇気のいることでした。しかし、この先に私が語ろうとしていることの冒頭において、初対面の町長に向かって最初に投げかける言葉として、私は、あえてこの言葉を選びました。

私が町長の話聞きながらみきわめようとしていたことは、この町長は私に何を期待しているのか、ということでした。行政のトップとして、でき得る限りの対策に邁進し続けたものの、それであつても万全とは言えない。そのような苦悩のなかで、さらなる対処によって万全に近づくための具体的な処方箋を私に期待しているのか。それとも、対策は重ねるものの、その先に万全は得られないことを受け入れて、そのうえで想定に向かい合う地域のありようを模索し、それを導く防災行政の指針を求めているのか。私は話を聞きながら、町長の心は後者にあると感じ取りました。

私から軽いタッチで語られた、思いもしない「日本一でよかったですか」との言葉に、町長は耳を疑ったと思います。日本一深刻な状況に置かれ、苦悩し、藁にもすがる思いで相談を持ちかけた防災研究者から、開口一番に語られる言葉としては、想像の範囲を超えるものだったでしょう。しかし、そこには私なりの揺るぎない思いがあり、この町長なら受け取ってくれるとの判断もありました。

呆気にとられる町長に、私は、矢継ぎ早にその真意を説明しました。初対面の町長ですから、そのお人柄を知っているわけでは

なく、間髪いれずに説明し切らないと、いまにも激怒されるのではないかと怖かったからです。

しかし、この真意をしっかりと理解していただくための説明は、容易ではありません。これまでのわが国の防災に対する社会通念からいえば、大きな津波想定が出された以上は、被害が生じないように努めるのが行政の役割であり責任であり、そのための備えを担う責任者は行政トップの首長ということになります。そして、責任感が強ければ強いほど、その社会通念により強く縛られて、対策強化に邁進することになります。

お会いした時点での黒潮町長も、その一人だったのかもしれませんが。首長がそのような状態であるとしたら、日本一の津波想定に対して「日本一でよかったじゃないですか」とは、あまりに不謹慎であり、受け取ることができない言葉となります。しかし、私があえてこの言葉を臆することなく、しかも軽いタッチで言つてのけたのは、そもそも問題のとらえ方(フレーム)が違うということを示したからです。

黒潮町長に私の言葉の真意を理解していただくための説明は、「想定」についての、私の次のような考え方から始めました。それは言うなれば、想定のとらえ方のリフレーミング(物事をみる枠組の変更)を目指したものでした。

一〇〇〇年に一回とも言われる巨大津波が実際に起こり、それに相応する想定が出されたわけですから、黒潮町はそれに精いっぱい備える必要があります。しかし、想定された三四・四メートルの巨大津波が実際に起こってしまったら、防潮堤などのハード対策によってそれを完全に防ぐことは無理に決まっています。

しかし、ものは考えようです。今回の巨大津波想定は、一〇〇〇年に一回程度の可能性で出された想定です。もちろん、次の津波がそれである可能性もあります。しかし、これまで日本の防災で標準的に想定し備えてきたのは、おおむね、一〇〇年に一回程度の津波です。それとの比較で考えると、一〇回に一回程度の割合で、今回の巨大津波想定のような事態もあり得るということです。言い方を変えると、次に来る津波は、一〇回のうち九回は従来想定程度の津波である。つまり「十中八九は巨大津波ではない」と考えることもできます。

確率的には一〇〇〇年に一回ですが、いまからちょうど一〇〇〇年前といえは、紫式部や清少納言が活躍した平安時代中期にま

で遡ります。その時代からいまに至るほどの長い時間のなかで、一回起こり得ることとして想定された津波。そう考えれば、そんなこともあり得るだろうと冷静にとらえることもできます。一〇〇〇年に一回の津波想定に備え切らなければ防災にあらず、と言わんばかりの日本の防災の考え方には無理があるのです。

だから安心してよい、と言っているではありません。一〇〇回に一回でもその可能性があるのであれば、精いっぱい対処はすべきでしょう。しかし、それはハード対策で物理的に被害を排除するよう備える話ではなく、避難を中心とした社会の対応として議論すべきです。そして、社会の対応で議論するのであれば、この想定について正しく理解したうえで、まずは、想定に社会がどのように向かい合うべきかという思想を固めるべきです。

一番よくないことは、次の津波が、あたかも今回の想定のような巨大津波であると固定的に考えて、避難そのものをあきらめてしまうことです。しかし、このような想定が出されると、人はそれにとらわれてしまいがちです。現に黒潮町では、沿岸部のお年寄りなどを中心に、あきらめてしまう避難放棄者が出始めました。

このような考えにとらわれていたのでは、いつまで経っても、正しく想定に向かい合うことはできません。仮に一〇〇〇年に一回の想定を、さらに三〇〇〇年に一回、五〇〇〇年に一回と改めたとしたら、計算される津波の高さの数値はさらに大きくなり、それにとらわれて、さらに怯えることになってしまいます。想定の意味することを十分に理解せずして、避難することそのものをあきらめてしまったのでは、従来想定は津波ですら、命を守ることができません。まさに本末転倒と言えます。

このように考えると、黒潮町の津波防災は、まずは、一〇〇年に一回程度の従来想定にしっかりと向かい合うことが重要である。そのうえで、一〇〇回に一回程度、つまり一〇〇〇年に一回程度の割合で東日本大震災クラスの巨大津波が来る可能性もあるのだから、従来想定に対するいままでの避難でよしとするのではなく、さらに、でき得る限りの安全を積極的に求める。そのような姿勢を持つて避難すればよいということになります。

私は子どもたちへの津波防災教育において、①想定にとらわれるな、②最善を尽くせ、③率先避難者たれ、という避難三原則を

掲げてきました。このうち、最初の二つの原則は、まさにこのような考えに基づいたものです。津波の想定がどのように示されようとも、実際に生じる次の津波がどの程度の津波なのかは、誰にもわかりません。従来想定に基づく津波ハザードマップをみて安心することも、巨大津波想定にあきらめることも、あつてはいけません。相手は自然の成すことですから、いかなることもあり得ます。私たちが想定に向かい合う姿勢は、悔ることも怯えることでもなく、自然に対する畏敬の念を持って淡々と最善を尽くすのみです。想定はまさに諦観するべきものだと、私は考えています。

東日本大震災以降、そして日本一の巨大津波想定を突きつけられて以降、やれることはすべてやり、悩み抜いてきた黒潮町長は、私の想定に対する考え方を受け入れることができたようです。しかし、それであっても、「日本でよかつた」と言い放った私の言葉の真意にはたどり着きません。私はさらに、想定の本となったシミュレーションについて話を進めました。

黒潮町に示された巨大津波想定は、津波シミュレーションによつて計算されたものです。このシミュレーションは、地震研究の最新の研究成果に基づいて、津波の元となる南海トラフ地震の震源域を想定することに始まります。

南海トラフで起こった過去の地震に関する研究や、プレート^{プレート}の挙動を解き明かす研究など、地震研究の最新成果に基づいて想定震源域が設定されます。そして、想定震源域を与えたいうで、津波の発生、伝播^{伝播}に関わるシミュレーションが行なわれます。震源域で発生した津波が、海底地形の影響などを受けながら沿岸部に到達するまでの計算を行なうわけですが、沿岸部に到達した津波の高さは、海底地形の影響だけでなく、複雑な海岸地形の影響も強く受けて、伝播の速度が速くなったり遅くなったりします。さらに、津波がはね返ったり重なったりするため、シミュレーションで算出される沿岸部各地点での津波の高さは、きわめて不安定なものになるのです。

私は地震や津波の現象に関する専門家ではありませんし、津波シミュレーションの専門家でもありませんので、技術の詳細に及ぶ議論はできません。しかし、シミュレーションに基づいて算定された津波の高さは、震源域の範囲などの与え方や、海域をどの程度詳細に区切って計算するのかなど、与える条件のわずかな違いによつて大きく変化することは確かです。

このようなシミュレーションに基づいて算定された津波想定であることを踏まえて、黒潮町の三四・四メートルという巨大津波想定を考えてみると、また別の見方もできます。

津波シミュレーションを沿岸部全体に行なえば、各地にそれぞれ津波の高さが算定されますが、どこかで最大の値が、またどこかで最小の値が出てきます。今回の想定では、たまたま黒潮町に算定された津波の高さが一番でした。しかし、条件の与え方によって、それぞれの地点での津波の高さの算定値が不安定に変動することを考えれば、三四・四メートルという数値には、「大きい地震があれば、大きい津波が来る」ということ以外の意味はありません。さらにいえば、大きい震源域を想定したのだから大きな津波が来ることは、いまさら指摘されなくてもわかっていました。津波想定が三四・四メートルであろうが、二四・四メートルであろうが、一四・四メートルであろうが、大きな津波が来れば危ないことには変わりはありません。

多少乱暴な説明であることはわかっていますが、三四・四メートルという日本一の想定津波高にとらわれて、長く苦しんできた町長の心を軽くするためには、多少乱暴であっても、必要な説明だったと思います。

誤解されないように付言しておきたいのですが、私は、津波シミュレーションや算定された津波の高さに意味がないと言っているわけではありません。地震大国、津波大国のわが国にあって、その現象を説明したり、再現したりするシミュレーション技術を高めることの学術的意味は大きいと考えています。

また、国や都道府県のように広い観点から防災を考え、政策や対策を講じる立場にあれば、おおむね、国土や県土がいかなる事態になり得るのかを把握する必要がある、このようなシミュレーションに基づいて津波の高さをマクロにとらえることは重要なことだと考えます。

しかし、市町村などのように地域や住民と直接向かい合う立場で防災を考える場合、シミュレーションによって示される各地点の津波の高さは偶発的な値であること、にもかかわらず、住民に対する影響がきわめて大きいことに十分な配慮が必要だと思います。

震源域の想定が高度な知見を反映しているからと言って、また、津波のシミュレーション技術が最先端であるからと言って、それによって算定された津波の高さの値そのものが地域にとって精緻なものであるとは決して言えません。このような想定値を提示する場合は、それを踏まえて、¹地域防災としてどのように理解すべきなのかを丁寧に説明することが求められます。最先端の科学が、最先端の防災に直結するわけではないのです。

想定のとらえ方をリフレームして、シミュレーションに基づいて算定された津波の高さの意味を説明したところで、黒潮町長の顔が穏やかになったような気がしました。そしてあらためて、「町長は何に怯えているのですか」と問いました。

黒潮町は、太古の昔から、大きな地震とともに大きな津波に襲われてきた町です。東日本大震災の前も、その後も、この巨大津波想定が出る前も、その後も、黒潮町と海の関係は何も変わっていません。しかし突然、黒潮町は怯え始めました。そのきっかけは、明らかに巨大津波想定です。町長が怯えているのは、太古の昔から何も変わらない黒潮町と海の関係ではなく、巨大津波想定そのものなのです。この想定のとらえ方、理解のあり方を正さない限り、黒潮町は前を向くことはできません。それを町長は理解してくれました。

津波想定を正しく理解しているのであれば、その値にいちいち右往左往する必要はありません。そうはいつでも、日本一の津波想定を突きつけられれば気持ちのよいものではありませんが、このような想定を理解ができていれば、そのもとの、町長はうまく町民を導くことが可能です。

どのように想定されようとも、大きな地震があれば大きな津波が来ることには変わりない。一番であろうと二番であろうと単なる想定値であって、危険であることには変わりない。そうであれば、いつそ一番がよいに決まっています。一番であれば、「日本一の津波の町で日本一の防災を目指す」と打ち出して、それを御旗^{みはた}に町民をまとめ、一致団結して津波に向かい合う気運をつくることができる。これは二番ではできないことです。「日本一でよかつたじゃないですか」との私の言葉の真意を、町長にしっかりと理解していただくことができました。

*

防災における行政対応の限界が広く認識されるなかで、共助の中心となる地域コミュニティの重要性も広く理解されるところとなってきました。

しかし、その一方で、都市化の進展に伴ってコミュニティの機能が失われ、防災において共助の推進が難しいとの声も多く聞かれます。特に、避難に際しての要配慮者の支援については深刻な状況があります。行政対応の限界とコミュニティ対応が困難な状況の狭間で、要配慮者から多くの災害犠牲者が出ている現実、コミュニティに属するすべての人にとって看過できない問題です。

しかし、「コミュニティが崩壊しているから防災ができない」という議論について、私は疑問を持っており、むしろ発想を転換すべきではないかと思っています。

もともとわが国では、コミュニティは地域にとって防災の要でした。その象徴が地域消防、昔でいうなら「火消し」です。江戸の町はすべての建物が木造で、ひとたび火事が起きると大変です。お上がどうのこうのと言っている場合ではない。初期消火に失敗すると延焼が広がり、町は焼き尽くされてしまいます。そのため、地域の皆で協力して初期消火に躍起になったのです。防災は上のもではなくて、あくまで地域の皆で共有する重要な問題であり、コミュニティは自衛手段として存在の必然があったと言えます。

ところが現代になって、かつての「火消し」は消防行政となって、現代のお上である行政の仕事になりました。それによってコミュニティを維持する必然が失われ、コミュニティのよい機能よりも、むしろ、煩わしさが大きく認識されるようになりました。そこに、コミュニティが崩壊するに至る必然があったのだと言ったわけです。

しかし、ここ最近の自然災害の荒ぶりのなかで、住民は行政対応の限界を意識しており、行政対応がかなわない部分は地域コミュニティで対応せざるを得ないことに気づき始めています。つまり、かつての江戸の町にとっての火災が、現代では自然災害に

なり始めていると考えることができます。

この状況は、コミュニティ再生のチャンスだと私は思います。発想を転換するなら、「コミュニティが崩壊しているから防災ができない」と考えるのではなく、「地域にとつての共通の敵である自然災害に皆で向かい合うことによつて、コミュニティの再生につなげる」と考えたほうがよいと思うのです。

三重県尾鷲市^{おわせ}は、一九四四年の東南海地震津波で六五名の死者を出し、その後も、たびたび津波に襲われている地域です。

私は、二〇〇一年から、津波防災を中心に尾鷲市の地域防災に取り組んできました。しかし、海岸まで山が迫る入江の集落も多く、このような地域では津波防災のみならず土砂災害も重要な防災の対象となります。少々古い事例になりますが、二〇一〇年の尾鷲市古江地区での土砂災害防災の取り組みを紹介します。

尾鷲市の古江地区は賀田湾の入江に山が迫る地域で、山の斜面に四〇〇軒の家がはりついています。平地がほとんどなく、海と山との境に地域の主要道路が走り、すぐに山の斜面となっています。四〇〇軒のうち、およそ二〇〇軒は空き家で、住民基本台帳の上では約七割が高齢者となっていますが、市街地に住んで住所だけを残す人も多くいるため、高齢化の実態はさらに厳しい地域です。

そんな地域にあつて、土砂災害の防災はどのように進めればよいのかと相談を受けたのですが、これといった打開策も見当たらず、当初は、地域を歩きながらいぶん考え込みました。急斜面での日常生活そのものが超高齢化した住民にとつて厳しいものがあり、災害が迫ったときの適切な避難策を、どうしてもイメージすることができませんでした。

しかしあるとき、高齢者たちがあちこちで語り合っている姿をみて、日常生活の延長にある「頑張らない避難」^ウを思いつき、それを提案したのです。

まず、住宅地図を貼り合わせた大きな地図をテーブルに出し、高齢者の皆さんに色塗りをしてもらいます。黒は空き家です。住宅の半分は黒に塗られてしまいます。そして、赤は誰かが助けに行く必要のある家。青はいまでも山仕事をやっているような元気

な家、つまり、助ける側になりえる家。黄は自己完結で避難できる家。このように、黒以外は三色で色分けされました。

この色分けの作業は、微笑ましいものでした。一人暮らしのおじいさんの家を、元気なおばあさんが赤で塗りました。おじいさんは、「ワシは逃げられる」と言い張るのですが、おばあさんは「何言つとんの」と取り合いません。不機嫌なおじいさんをよそに、家は赤に塗られて作業は続きます。地域の高齢者たちが身を寄せ合いながら、お互いの生活状態を気遣うというより当たり前のように把握し合い、ともに暮らす地域は、日々の生活すら大変な状況であるにもかかわらず、どこか穏やかなもののように感じられました。

その後、三色に色分けされた家を、避難に際して一緒に行動するのに程よいグループにまとめて「防災隣組」という単位をつくりました。そして、逃げるときも、とどまるときも、隣組で行動するというルールを決めました。このルールがあることにより、「ワシは逃げん」と言うおじいさんは、「あんたは、死んでまで人に迷惑をかけるのか」と、元気なおばあさんに叱られることとなります。こうして、超高齢化した地域の避難をできる限り促すような仕組みをつくりました。

この「防災隣組」の避難のあり方については、頑張らないことを勧めました。「災害が迫ったときには頑張らないよう心がけてください。大きな台風が来るときは、若い者だって不安です。まして、年寄りが一人、二人で暮らしている世帯は、みんな不安に決まっています。みんなが不安なときに、みんなが一人ひとり頑張るなんてことはしなくていい。今夜、台風が来そうになったら、みんなで早いところ避難所へ集まって、楽しく過ごせばいいんです」と話したのです。

私が言っていることは、「高齢者は早めの避難が大切です」ということにほかならないのですが、このように話したのは、同じことを伝えるのにも、高齢者の思いを基準にして、表現を変えるだけでその話を受け取った側の気持ちが変わると考えてのことでした。

このような取り組みをした結果、台風が接近してはいるものの、まだ避難に関する情報を検討する状況にはないにもかかわらず、尾鷲市役所の防災担当には「避難所を開けてほしい」と電話が鳴るようになりました。早くから開設された避難所には、久しぶりに顔を合わせたお年寄りたちが、手料理やお酒を持って防災隣組の単位で集まり、避難の名のもとに、楽しい集いの場となつて

いたようです。

この「頑張らない避難」は、本来、地域が持っていた日常の思い合いの延長に立って、自然に身を寄せ合うコミュニティの姿を災害時に実現するよう促したものだと考えます。そこには行政や専門家が考えるような、難を逃れるための緊迫感や悲愴感ひそろとは異なる姿の避難があると思います。

災害犠牲者の多くが高齢者を中心とした要配慮者によって占められる事実は、長年にわたって議論されているものの一向に解決されない状況にあり、わが国の防災において最重要課題であることに間違いありません。

しかし、これだけ長きにわたり問題視されてきた要配慮者問題であるにもかかわらず、そして地域防災の重要な取り組みとして位置づけられてきたにもかかわらず、一向に改善が図られないのはなぜでしょうか。

ここでは住民一人ひとり、そしてコミュニティの観点から考えてみたいと思います。

災害時の要配慮者問題は、行政と一部の地域防災リーダーの範囲で対処される状況が続いており、住民一人ひとりの問題として認識されているとは言いがたい。しかし、超高齢社会が進むなかで、いまのままでは問題は一向に解決されないと考えられます。なぜ住民一人ひとりの問題とならないのかは、一般にコミュニティの希薄化の問題と解釈され、地域の実情としても、災害時には要配慮者のことは気になりつつも、普段の関わりの距離感から、災害時に助けに向かうことに唐突感が否めない。そのような感覚なのだろうと思います。

しかし、このままでは問題は解決されませんので、一般の健常者にも何らかの意識改革が必要になります。そこにおいて、「人は時間の流れのなかで物事を考えることを得意としない」という特性が、問題への対処において、一つのヒントを与えてくれます。

まず認識しなければならないことは、災害時要配慮者問題を議論している私たちは、いまの段階では要配慮者ではなく、支援する側として、要配慮者という「助けが必要な集団」を対象に議論しているという構図です。そこには、「いまの高齢者は、いずれ自分の行く末の姿である」という認識は薄い。長期的な時間軸のなかで考えれば、誰もが将来において必ず当事者となる問題である

にもかかわらず、対策を検討する者たちは、いま現在において「自分ではない」要配慮者という特定の集団に生じている問題ととらえがちです。しかし、長期的な時間軸で考えることができれば、「要配慮者の姿は、将来の自分」という認識が生まれ、この問題にも当事者感が生じると思います。

そして、自分たちが要配慮者を気遣う姿は、その背中をみて育つ子どもたちに、育みの環境として直接的な影響を与えます。同じように長期的な時間軸でとらえれば、いまの子どもたちは、一〇年後、二〇年後に地域の中心になる大人たちです。したがって、将来における地域防災のありようは、いまの子どもたちに与える育みの環境にかかっていることに気づきます。

防災教育は学校だけが担う教室座学と思いますが、それ以上に、いまの地域社会を構成する大人たちの防災への姿勢そのものが、子どもたちの育みの環境を介して、将来において、高齢化した自分が属する地域社会の防災の姿に直結します。それを認識できるとき、子どもたちへの防災教育も自らに直接関わる重要な問題であることに気づくことができるのではないのでしょうか。

このような問題のとらえ方は、最近になって議論が活発化している「フューチャー・デザイン」^エの考え方と整合しています。

「フューチャー・デザイン」とは、「地球環境問題、人口減少、政府債務の膨張など、世代を超えた持続性に関する政策課題を解決し、将来世代に持続可能な自然環境と人間社会を引き継いでいくために、どのような社会制度をデザインすべきか」を学際的に研究する試みです。ここでは、テーマを議論するときに「現在世代」と「仮想将来世代」に分かれて議論するという実験が行なわれており、大変興味深い試みと注目しています。

私たちは、どうしても「いま」を基準に物事を考える傾向が強く、思考や判断の基準も「いま」の尺度に基づいています。しかし、自分が「将来を生きる人間」だったらどのように考えるだろうか。時間軸を導入して物事を考えることで思考の幅が大きく広がり、災害時の要配慮者問題にも当事者感を持つことができる可能性が広がります。

人はとかく「いま」に縛られ、時間経過のなかで移り行く自分に視座を移して物事を考えることを得意としません。ましてや、災害という好ましくない事態においてはなおさらです。だからこそ、「フューチャー・デザイン」は効果的なコミュニケーション戦略

の一つとして、防災コミュニケーションに積極的に活用すべきものだと思います。

災害時の要配慮者問題を含めて防災の諸問題は、いまの地域コミュニティに顕在化した問題です。そのコミュニティは、その地域の日常のなかで形成され、生活形態の必要性に合わせて変化し続けて、現在の姿があります。そのコミュニティの姿が、災害という地域の危機の際に機能しない状況に陥っているのであれば、私たちは、自分の暮らす地域のありようを、それぞれが自分の問題として考えなくてはならないのだと思います。

地域防災は、そのコミュニティに属するすべての人にとって、共通の敵に向かい合うという問題であり、そこに暮らすすべての人を皆で守り合う機能を確保するという問題です。いまのコミュニティに属している子どもたちの姿はかつての自分の姿であり、高齢者の姿は自分の行く先の姿です。いまのコミュニティが要配慮者を守り切れないのであれば、そのようなコミュニティに育まれた子どもたちが形づくる将来のコミュニティも、要配慮者を守り切れないコミュニティとして継承されることになる。そこには、コミュニティに守られない将来の自分が要配慮者として存在することになります。

このように考えると、地域防災のありようは、脈々と流れる時のなかで形づくられた地域コミュニティの機能として議論されるべきことであり、コミュニティに防災の機能を追加することだけを求める議論では実効性に乏しいことがわかります。

そして、何よりコミュニティの議論は、地域のリーダーや行政に委ねる話ではなく、自分がその地にどのように暮らしたいのかを将来にわたって考える、当事者問題なのです。

出典 片田敏孝『人に寄り添う防災』集英社 二〇二〇年(ただし、本文の一部に改変および省略がある。)

注一 防災基本計画の作成や、防災に関する重要事項の審議等を行う内閣の重要政策に関する会議の一つ

注二 駿河湾から日向灘沖にかけてのプレート境界を震源域として概ね一〇〇〜一五〇年間隔で繰り返し発生してきた大規模地震

問一 傍線部ア「町長、日本一でよかつたじゃないですか」とあるが、著者が町長に向かってそのような言葉を投げかけた真意を一五〇字以内で説明しなさい。(配点三〇点)

問二 傍線部イ「地域防災としてどのように理解すべきなのかを丁寧の説明することが求められます」とあるが、それはなぜか。本文の内容に即して三〇〇字以内で説明しなさい。(配点六〇点)

問三 傍線部ウ「頑張らない避難」を思いつき、それを提案したのです」とあるが、著者がそのように提案した意図を三五〇字以内で説明しなさい。(配点六〇点)

問四 傍線部エ「フューチャー・デザイン」に関連して、本文における「フューチャー・デザイン」をめぐる議論を踏まえながら、「世代を超えた持続性に関する政策課題」の例を一つ取り上げ、発達コミュニティ、環境共生、子ども教育のいずれかの観点から、あなたの考えを六〇〇字以内で論述しなさい。(配点一〇〇点)